

2020 年度外国人留学生向け懸賞論文選考委員会委員長講評

今回の懸賞論文には 40 編を超える応募があった。COVID-19 感染防止の観点から大学教育が大きな影響を受けている時期なので応募数の減少が心配されたが、かえって例年より多くの応募を頂戴した。応募された留学生の皆様には審査委員会として感謝申し上げる。今年の特徴は、応募される留学生の出身国が一段と多様化したことである。また昨年はずべて英語でしたが今年は日本語の応募もあった。

審査過程の概要を示せば、第 1 次審査で 20 編に絞り込み、第 2 次審査で 20 編についてすべての委員が得点付けし、それをもとに最終審査において各委員が審議の結果、順位付けを行った。さらに事務局による盗用や剽窃のチェックが行われた。

最終審査の結果、第 1 位にフィリピンの Pia Marie Punzalan Medrano(Ms.)さんの Insurance and Poverty Reduction: Evidence from Philippine Urban and Rural Household Data、第 2 位にタンザニアの Rehema Mussa Karata(Ms.)さんの Social Security Gap, Adverse Welfare Shocks, and Digital Innovation for Life and Health Microinsurance in Tanzania、第 3 位にベナンの Dougnon Tchetonougbo Godfried(Mr.)さんの A Quantitative Non-Experimental Investigation of the Potential Pitfalls Confronting International Students in Kyoto's Health Insurance Literacy and Self-Efficacy、とフィリピンの Jason Martin Apostol Naniong(Mr.)さんの Stealing the Future: Philippine Health Insurance Corporation's Battle against Fraud and Corruption、が選ばれた。

第 1 位受賞論文は、フィリピンの家計データを用いて保険が貧困の撲滅に果たす機能に関して実証分析をおこなっている。その結果、保険という手段が、貧困と背中合わせとなっている人々にとって重要なものであると結論づけている。健全な問題意識をもち、実証分析もクリアで実証結果も妥当であり、説得性の高い論文であることが高く評価された。

第 2 位受賞論文は、タンザニアにおいてモバイルマネーが家計の生保リスクのショックを和らげるということを実証した論文である。デジタル技術を活用することによって、マイクロインシュアランスを促進して貧困層が減少する可能性をしめすものとして評価された。

第 3 位受賞論文のうちベナン出身の Dougnon Tchetonougbo Godfried(Mr.)さんの論文は、昨年も同様のテーマで別の方が研究されたものをサンプル数及び手法などで改善したものである。テーマとしては「二番煎じ」ではあるが、周到に用意したアンケートを用いて分析するなど、手作り感のある好論文に仕上がっている。フィリピンの Jason Martin Apostol Naniong(Mr.)さんによる第 3 位受賞論文は、フィリピンの国営健康保険団体である PhilHealth をめぐって質的分析をおこなった上で、ベンフォードの法則を用いた統計分析を用いて、不正の可能性を実証した論文である。問題意識の高さ、および興味深い分析手法の導入などが評価された。

惜しくも上位入賞から漏れた論文にも評価の高いものが数多くあった。努力賞の中から

例をあげれば、スリランカの Lakshika Chamini Weragoda(Ms.)さんの Maternal Health Insurance Status and Utilization of Health Care Facilities: Evidence from Nigeria は、母の健康保険加入と医療施設の利用の関連を実証分析した論文である。スリランカ出身の方がなぜナイジェリアの分析なのかという疑問は残るが、修士課程の1年生の作品としてみると有望だという意見もあった。インドネシアの Syahla Salsabila(Ms.)さんの The Role of Family Takaful in Modern Society and Analysis of Family Takaful Supply and Demand in Malaysia and the United Kingdom は、タカフルの説明部分についてはすでに知られていることではあるが、大学2年生の作品としては高く評価できるという意見もあった。

この他にも数多くの優れた作品があったが、残念ながら曖昧な分析、妥当でない結果、ネットからの安易な引用、学術的な論文のフォローの欠如などの欠点が見られ、受賞を逃すことになった。最近の傾向として、大学院生の英語による応募が多くなってきているが、われわれとしては学部生の応募や日本語論文の応募も歓迎したい。本制度が、日本で学ぶ多くの留学生が保険の意味を考える機会となり、その知見を母国の発展に広い意味で役立てていただけるということを期待して、講評を結びたい。

(公財) 国際保険振興会論文選考委員会委員長
東京経済大学教授
米山高生